石炭窯

有田工業学校の二階式石炭窯

焼物の町・有田の代表的な景観として、大きな煙突が立ち並ぶ風景があります。

この風景が、いつごろから、どのようにして形成されたのか。これには、有田焼の生産増加にともなう窯用燃料の変化が関係しています。

かつて焼物の焼成を行なっていた登窯は、松薪を燃料としていました。しかし、松薪は必要とされる量に足りず、やがて、慢性的な不足をおこしていきます。明治期の生産増大がさらに状況を深刻化させました。このような中で次代の窯用燃料として量が豊富で廉価な石炭が注目され、大きな煙突をもった石炭窯が現れます。

有田で最初の石炭窯は、明治３年(1870)にワグネルよって築かれ試焼されたといわれています。この後も、多くの人が実験を重ねていき、大正ごろから本格的な実用に入りました。有田の大きな煙突の風景は、このときの技術革新の過程で興ったものです。

写真の石炭窯は、明治33年(1900)※に泉山の有田工業学校（現、有田タイル工場跡地）で築かれたものです。日本で最初の二階式石炭窯で、１階を本焼室、２階を素焼室としていました。

この窯は残念なことに、昭和32年(1957)ごろに取り壊されて今はありません。しかし、写真の中に収められたその姿は、有田の歴史を静かに語りかけてくるようです。

※「有田磁業史」の記述による。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No. 28

皿山の人物

松本佩山（まつもと はいざん）

陶磁器の中に独自の世界を封じ込め、表現の可能性を探求する人たちがいます。一般に陶芸作家と呼ばれる人たちです。今、有田で、そして各地で多くの陶芸作家が活動しています。

しかし、肥前における陶芸作家の登場は、それほど昔のことではありません。有田において、その存在が明確に認識されるようになったのは、戦後になってからのことではないでしょうか。

有田の陶芸作家の草分的存在であり、最初の陶芸作家ともいえるのが、今回ご紹介します初代・松本佩山です。

佩山は、厳（いか）つい風貌の持ち主で、体が大きく力が強かったため、彼をよく知らない人からは怖がられたりもしたそうです。とくに若き日の佩山は、大阪で放浪の絵描きになったり、中国・奉天（ほうてん）（現、瀋陽（しんよう））で警官になり馬賊とつきあったりと、その行動に、破天荒（はてんこう）ともいえる趣があります。

松本佩山が有田に戻り、本格的な作陶活動に入ったのは、大正９年(1920)ごろのことです。その佩山が、陶芸作家として最初の脚光を浴びたのは、昭和８年(1933)の帝国美術院・美術展覧会（帝展）への入選でした。これは、有田のみならず九州でも最初の帝展作家の誕生であり、まさに快挙でした。

松本佩山　57歳の時の写真
明治28年(1895)生～昭和36年(1961)没

陶芸作家・松本佩山を象徴する出来事が、もう一つあります。それは、第二次大戦中のことです。贅沢品（ぜいたくひん）を禁止する政策が進む反面、例外として「芸術保存者」の指定が行なわれました。松本佩山は、九州でただ一人、この「芸術保存者」に選ばれたのです。国が佩山を「芸術家」と認めたわけです。

この佩山が常に目標としたのは、焼物先進国・中国の陶磁器でした。佩山は生涯を通して中国陶磁器の研究を行なっています。絶えまぬ研究は、やがて、多様な作品を生み出し、最高傑作ともいえる「釉裏紅霊獣文大鉢（ゆうりこうれいじゅうもんおおばち）」へと開花しています。釉裏紅とは釉（上薬）の下で文様を赤く発色させたもので、薪燃料での発色は、とても難しい技です。釉裏紅の、しかも直径約63cmもの大物となると、その難度は測りしれません。

「死んでから値打ちが下がるのは作家の恥」と語る佩山は、常に研究に打ち込み、作陶に情熱を燃やした人でした。長男、平氏（２代佩山）の話によると、佩山の作陶に対する姿勢は、あくまで職人であることを基本とし、職人としての作陶の中に作家としての表現を盛り込んでいったそうです。

陶芸作家の先駆者、松本佩山の芸術。それは職人としての技に立脚しつつ、職人の域を突き抜けた至芸ではなかったでしょうか。　（松尾隆一）

釉裏紅霊獣文大鉢

写真提供　２代松本佩山氏

研究ノート

有田焼と波佐見焼

―17世紀を中心に―

有田と波佐見はともに現在も窯業を地場産業としています。今は佐賀県・長崎県境が両者を隔てているように昔は佐賀藩・大村藩境が両者の間に引かれていました。この今昔の行政区分がそれぞれの産地の特色をつくりだした一因であることは確かですが、同じ肥前地区として地理的・歴史的な環境を共有してきたことも事実です。

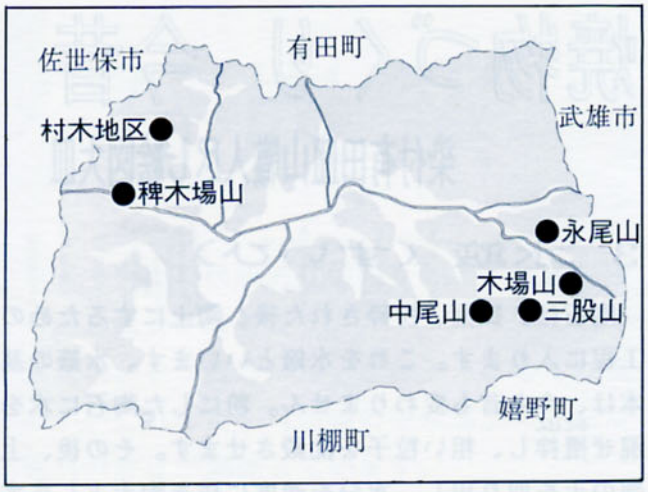
Ⅰ．1580～1630年代

有田も波佐見も陶器をつくることから窯業が始まり、後に磁器の生産に成功しています。当時の有田の窯業の中心は西部地区です。比較的平野が開けた場所です。そして、波佐見の窯場も似たような立地環境にあります。このころの両者の窯を比べると、波佐見の村木地区の窯場は有田の南川原周辺の窯場に非常に似ている一方、波佐見の稗木場地区の窯場に似た窯場は今のところ有田には見当たりません。初期の段階には異なった技術をもった集団が複数あったと思われます。

Ⅱ．1630～1650年代

この時代は磁器中心に変わっていきます。有田では現在の内山地区中心の窯業圏が形成されます。波佐見でも同じように原料産地に近い三股、中尾地区などが中心になります。しかし、製品にはそれぞれの特色がみられます。波佐見の三股古窯、三股青磁窯では青磁が大量に生産され、優品も多く含まれています。有田では程度の差こそあれやはり染付が中心です。このころ青磁を主体とした窯というのはありません。そして、1640年代からは色絵の生産が始まります。波佐見でも色絵陶片がわずかに採集されていますが、そのころ色絵生産を行なっていたとするにはまだ証拠不十分です。あるいは青磁を主体に生産していたことから色絵にはあまり関心がなかったのかもしれません。

こうした違いは原料、顔料や技術的な条件の違いによると思います。技術・顔料の輸出国であった中国との関わり方も考えなくてはなりません。



17世紀の波佐見の主な窯場

Ⅲ．1650～1690年代

この時代の有田・波佐見は海外貿易などによって活況を呈していました。明末清初の動乱という中国の国内事情と遷界令という一種の鎖国令は焼物の国際市場の空白を生み出し、その空白を埋めるものとして肥前の窯業界に白羽の矢が立ったのです。これは国内市場においても同様です。

有田では赤絵屋を集めて赤絵町を形成して、より均質で大量に赤絵製品を生産するシステムをつくりました。また、内山地区を中心とした生産体制もさらに整えられたと思われます。一方、波佐見では「皿山旧記」などの古文書によると1660年代には中尾下登、永尾山、木場山、稗木場山などが次々と開窯したと思われ、皿山役所を三股に設置したのもそのころといいます。量産体制を急速に整える様子がうかがえます。そして、その中身をみてみると、青磁の生産も続いていますが、それに加えて染付の生産が増加しています。永尾山、稗木場山などの窯跡では、染付が主体となって出土しているのです。有田の窯の中にも青磁を大量に生産する窯が1650～1660年代にかけて現れます。これらは当時の需要を反映した結果と思われますが、波佐見が染付の量産化を進めた背景には染付顔料である呉須の入手が比較的容易になった可能性も考えています。

当時の有田焼はヨーロッパ・アフリカ・アジア、またアメリカ大陸にも渡っています。そして、同じく波佐見焼も東南アジアを中心に盛んに輸出した時代です。有田も波佐見も海の向こうを見ていた時代でした。　（野上建紀）

焼物づくり 今昔

染付有田皿山職人尽し絵図大皿

3　水簸（すいひ）

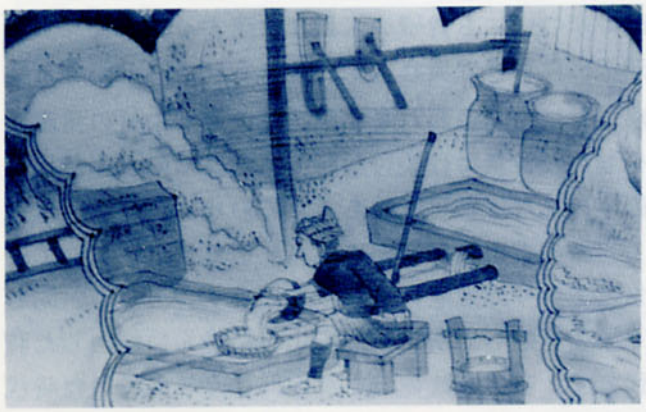
陶石は、採掘、粉砕された後、陶土にするための工程に入ります。これを水簸といいます。水簸の基本は、今も昔も変わりません。粉にした陶石に水を混ぜ攪拌（かくはん）し、粗い粒子を沈殿させます。その後、上部の土を取り出し、水分を適度に抜き陶土とします。

今では、水簸のほとんどの工程で機械化が進み、製土専門の業者が、それを行なっています。

しかし、江戸時代においては、佐賀藩の管理体制のもと、窯焼きの所でのみ水簸が行なわれていました。「土屋」と呼ばれる専門業者が現れたのは明治時代になってからです。江戸期の窯焼きが陶石の粉砕から製品の焼き上げまで、一貫して行なう権利をもっていたことを考えると、明治に製造工程の一部が分離されたことは、大きな変化であり、現在のような製土業者と焼物製造元との形が、このとき始まったともいえます。

実際の水簸作業は、機械化によって驚くほど時間が短縮されています。例えば、沈殿槽から土を上げるとき、現在では吸引機を使います。しかし、昔は冬瓜（とうがん）を二つに割った「ちょっぱげ」と呼ばれるもので掬（すく）い上げていました。また、今では沈殿槽から上げた土を、フィルタープレスと呼ばれる機械にかけ、あっというまに適度な水分の陶土にします。これに対し、以前は何日もかけ天日干しを行なっていました。時代の流れという言葉があります。有田の窯業にも、この言葉が確実に浸透しているようです。

（協力　南原　田島商店）



染付有田皿山職人尽し絵図大皿の水簸

街角の歴史

お知らせ

古文書教室（こもんじょきょうしつ）

毎年好評の古文書教室を、今年度も開催します。初級と中級の２クラスがあり、年間を通し開催しています。随時受付けていますので「古文書を読んでみたい」と思われている方、ぜひ参加してみませんか。

◎日　　時　　毎月第２水曜日
　　・中級　13時～15時
　　・初級　19時～21時
◎場　　所　　勤労者福祉会館
◎講　　師　　前山　博　先生
　　（伊万里市歴史民俗資料館館長）
◎テキスト　　・中級　『多久家文書』
　　・初級　『御掟写』
◎申 込 先　　有田町歴史民俗資料館

寄贈資料紹介

◆トンバイ　多数　　外尾山　大串和夫氏
　　有難うございました。

石場のこだま

1月26日。この日は文化財防火デーです。有田でも幸平の異人館で防火訓練がありました。先の阪神大震災では、多くの人命が失われるとともに、異国情緒漂う神戸の伝統的町並も大きな被害を受けています。人命はもちろんのこと、文化財も失われたらもう二度と戻りません。大切にしていかなければならないものがたくさんあるようです。　（り）

皿山びとの歌
有田町歴史民俗資料館報　No.28

発行年月日 ＊ 平成７年３月１日
編集・発行 ＊ 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地1
☎0955-43-2678　ＦＡＸ0955-43-4185